Akita University

秋田大学教育文化学部研究紀要　人文科学・社会科学部門　68　pp.69～75　2013

# 秋田県方言の特徴的アクセントおよび音韻に関する調査報告

## ―― 若年層の動態と意識 ――

大　橋　純　一

# The Investigation Report about Accent and Phoneme which are Particular in the Akita Dialect;Actual Condition and Consciousness of Younger Age Groups

Junichi OHASHI

**Abstract**

This paper aims at clarifying the actual condition of the Akita dialect spoken by younger age groups,by investigating accent and phoneme which are particular in the Akita dialect. For the purpose, I put focus on following three phenomena, the accent of two-syllable nouns(types IV,V), the nasalization of /g/ sounds, the fusion of diphthong in this research. Moreover, I investigated the image of the Akita dialect and the consciousness about their usage of dialect, and considered how it would be connected with each of above-mentioned actual conditions. As a result, it turned out that the accent of two-syllable nouns(types IV,V) is used differently in the dialect and the common language, that the nasalization of /g/ sounds is declining in a remarkable degree compared to other dialects, and that the fusion of diphthong tends to be held clearly. Moreover, in the survey on their awareness, it turned out that the image of the Akita dialect and the consciousness about their usage of dialect is complicated. According to the survey, it is implied that the accent and the phoneme of the Akita dialect vary, and that the variation is closely related with the complicated consciousness of younger age groups.

**キーワード**：秋田県方言，若年層，アクセント，鼻音化，融合化

**Key Words :** Akita Dialect, Younger Age Groups,Accent,Nasalization,Fusion

### はじめに

秋田県方言には，東北の隣接方言と連動して，アクセントと音韻の各要素に次のような特徴的事象がみとめられる。

1）類別語彙二音節名詞第四・五類のアクセントが語末母音の広狭によって規定される

2）語中の /g/ が鼻音化する

3）/ai/ 連母音等が融合化する

以上のうち，1）の事象は新潟県阿賀野川流域を境として東北の日本海沿岸域を中心に連続的な分布を呈する。他方，2）3）の事象は東北の一部地域を除き同域にほぼ連続的な分布を呈する。無論，東北方言をアクセントおよび音韻の面から特徴づける要素は上記に限られるものではないが，地域的な連続性という背景もあり，従来よりその各動態が隣接方言との対比のもとに注目されてきた（井上 1971，野口 1976，齋藤 1992，大橋編 1993，森下 1996，大橋 2002a など）。

筆者においては，以上の事実を踏まえつつ，1）については大橋（2002b）（2003a）などにおいてその地理的・年代的な様相を，2）3）については大橋（2000a）（2001）（2003b）（2012）などにおいてその地理的・年代的な（あるいは地点限定的な）様相を明らかにしてきた。また概説的にではあるが，大橋（2000b）において1）～3）の事象を扱い，それらに関する秋田県方言の様相についても触れてきた。

本稿は，それらとの比較も念頭に置きながら，上記の1）～3）に関する秋田県方言の現状，中でも若年層のそれに着目して調査報告を行うものである。

なお結論を先取りしていえば，当該方言では1）2）の衰退が著しく，特に2）に関しては他方言の直近の調査と比べてもその衰退の動きが際立っている。他方，3）に関しては諸方言一般において現象が持続的である点では共通するが，その持続の度合いが逆に際立っている。こうした動きが，たとえば各話者の，自県・自方言に対

Akita University

するどういった意識を背景に生じているものであるかは，その因果関係の抽出自体が目的ではないにしても，興味を引く問題である。よって，本稿では別途行った意識調査の結果についても触れ，当該方言の現状の意味を考える一助としたい。

## 1．調査の概要

調査は2012年6月～9月にかけて，秋田県出身の秋田大学生・大学院生，計61名（男性23名，女性38名）を対象に行った。話者の出身地は秋田市を中心に，県北～県南，内陸の各地域にまたがるが，[注1] 性別を含め，ここではそれらを区別せず，対象の61名を大きく秋田県方言話者と捉える。

調査内容は，既述したとおり，①上記1）～3）の実相を探るもの（動態調査）と②各話者の意識の面を探るもの（意識調査）とに大別される。①の1）は読み上げ調査，2）と3）は質問調査，②は選択式（一部記述）のアンケート調査によった。

## 2. 各事象の若年層における動態

### 2.1 類別語彙二音節名詞第四・五類のアクセント

ここに問題とするのは，アクセント高低と語末母音広狭との相関である。具体的には，平山（1957）に報告される

「第四類と，第五類との音調の山の位置が，第二音節の母音の広狭に支配される。即ち第二音節に広母音a・e・oがあれば尾高下型，狭母音i・uがあれば頭高型になるというきまりがみとめられる。」(445頁)

に関する秋田県方言（若年層）の現状を明らかにするものである。

平山（1957）以降，当事象は長らく東北の日本海沿岸域を中心に連続的な分布を堅持してきた。しかし大橋（2002b）（2003a）などによれば，年層が降るにつれ，また地理的には南西寄りの地域であるほど衰退の動きが著しい。秋田県方言の若年層がそうした動きの延長線上にあることは想像に難くないが，下記の16語（単語単独形および文節形「～ガ」）に即した調査の結果，その衰退は以下の図1・2に見てとれる程度にまで行き及んでいることが確認された。

・語末広母音系語：糸　稲　肩　空（第四類），井戸　婿　汗　窓（第五類）

・語末狭母音系語：息　麦　箸　松（第四類），秋　蛇　鶴　猿（第五類）

図1・2には，上記の16語に関する頭高型（●○▷）と尾高下型（○●▷）の出現割合を，第一次調査と第二次調査とに分別して示している。ここでいう第一次調査とは，アクセント調査一般がそうであるように，地元で

図1　二音節名詞第四・五類のアクセント（第一次調査）

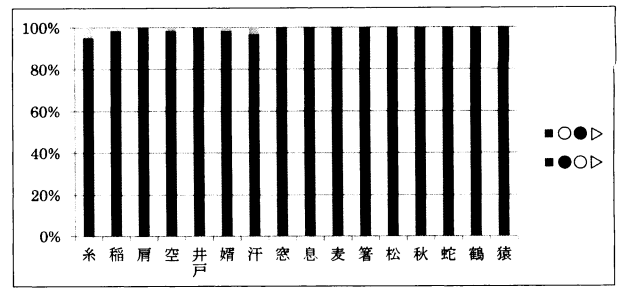
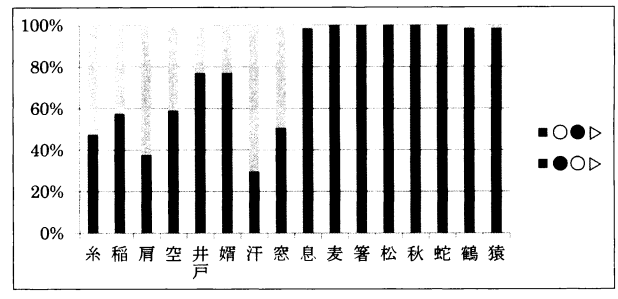



図2　二音節名詞第四・五類のアクセント（第二次調査）




のごく自然な発話を前提とした調査のことを指す。対して第二次調査とは，上記の前提に加え，さらに方言的な発話であることを想定した調査のことを指す。[注2] 後者に「方言」の条件が加味されている点では誘導的であるが，それはすなわち，当事象の衰退レベルがそうした調査を要求せざるをえないほどに際立っていることの裏返しでもある。

さて，平山（1957）に従えば，対象の16語は語末の母音広狭に支配されて，広母音系語（糸～窓）がこぞって尾高下型（○●▷）に，狭母音系語（息～猿）が頭高型（●○▷）に現れることが期待される。しかし，図1に見てとれるように，第一次調査からはそうした対立は一向にみとめられず，当2類（第四・五類）本来の●○▷が各語にまたがって一律に抽出されるに過ぎない。その様相は，あたかも東京式アクセントの規範をそれとして忠実に再現したかのごとくである。このことからすれば，当年層の二音節名詞アクセントは，一義的には上記するような方言的要素をほぼ落とし，共通語化の段階にあることが指摘される。

しかし一方，ここでさらに注意されるのが，図2の広母音系語（糸～窓）に○●▷が出来し，図1には見られなかった母音広狭による対立が，これを端緒に顕在化してきていることである。しかも狭母音系語（息～猿）に○●▷が紛れて現れることはほとんどなく，この両者には厳然とした縦割りがある。図2の基盤となる第二次調査とは，既述のとおり，「地元でのごく自然な発話」であることを前提に，さらに「方言的な発話」を想定するものだった。[注3] これによるならば，当年層においては，「方言」の意識が及ぶ範囲では相応の方言的アクセントをも

Akita University



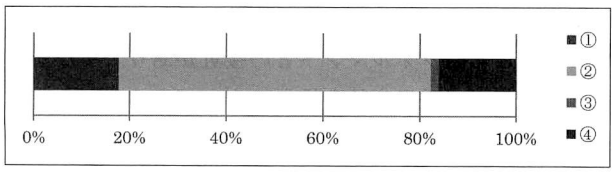
実現しうること，かつ広母音系語と狭母音系語とにアクセント高低の紛れはなく，その実現はかなり規則的であることがうかがえるのである。

以上は，言い換えれば，当年層がきわめて高度な使い分けの段階にあるということである。第二次調査において○●▷を実現する話者たちは，口々に「祖父母世代がそう言うのを聞いて知っている」と内省する。また,「この世代と話すときは自分もそのように言うことがある」とも内省する。つまり当年層は，通常発するべき規範としての東京式アクセントを確立しつつ，一方で，方言的場面のひとつのチャンネルとして，方言本来のアクセントをも知覚し，条件次第では併用しさえするのである。しかしそのチャンネルも，上記のような意識が働かない中では（つまりは第一次調査のように「地元での自然な発話」を漫然と問うだけでは）顕在化してこないという点で，必ずしも使い分けの一翼を担って今後も安泰であるとはいいがたい。特に図２において出現割合の凹凸が著しいこと，中でも日常性を欠く「井戸」や「婿」といった語を中心に○●▷の割合が大きく後退してきていることなどは，それの発音習慣としての基盤の弱さを物語っている。こうした動きは，おそらくはこの次世代においてさらに加速化していることが予測される。その意味では，当事象の痕跡は，話者当人の「方言」意識を特別に要求し，その知識を顕在化させない限りもはや明確には辿れないほどに，末期的状況にさしかかっているというべきなのかもしれない。

### 2.2　語中 /g/ の鼻音化

これについては，まずは「開ける」/akeru/ と「上げる」/ageru/ のミニマルペアに即して，各実相とそれによる弁別の在りようを鳥瞰することから始めたい。想定される実相パターンは① ke/ge，② ge/ge，③ ke/ŋe，④ ge/ŋe（以上，「開ける」/「上げる」）の４つであるが，調査の結果，その実現の内訳は以下の図３のように把握された。

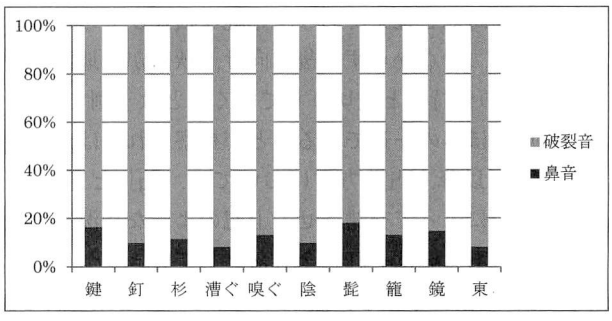
**図３　「開ける」/akeru/・「上げる」/ageru/の実相パターン**




これによれば，当実相パターンは②（ge/ge）が大勢を占め，①（ke/ge）と④（ge/ŋe）がそれに次ぎつつ拮抗すること，また③（ke/ŋe）がそれらに押しやられてほとんど見るべきものがないことがわかる。このうち②と④は，語中の /k/ をともに有声化して［g］に実現するタイプのものである。つまり当年層では，それがほぼ80％強に及んで保持されていることがうかがえる。その一方で，ここに注目する /g/ の鼻音化は③と④とでかろうじて20％弱を占めるに過ぎず，自身の衰退の動きと同時に，保持の傾向にある有声化との相違が際立つ結果となっている。それはすなわち，語中 /k/ と語中 /g/ とがこれまでの弁別規則を逸していく事態に他ならないが，当年層においては，そうした体系上の不合理に抵触しながらも非鼻音化の動きを特立させ，さらに強力に推し進めつつあることが見てとれるのである。

その動きは，個別の調査語[注4]に即して見た以下の図４においてより一層明瞭である。

**図４　各調査語における語中 /g/ の鼻音化率**




既に図３によっても鳥瞰されたことであるが，各調査語において［ŋ］に現れるものはせいぜい20％弱に過ぎない。語によっては10％を切るという低率である。このことからも，当年層における鼻音化は，もはや消失を目前にした最終局面にあると見なすことが妥当である。

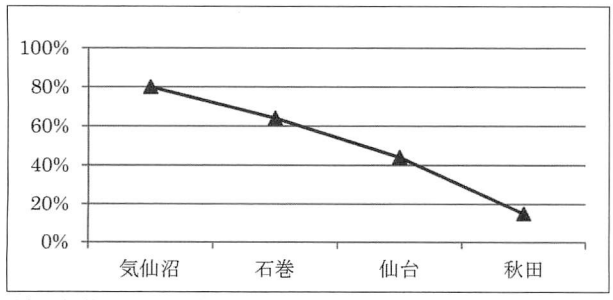
その見通しにさらに確信を持たせるのが，当該の話者たちの本調査への応対ぶりである。図４を一見すると，当年層の鼻音化率は平均して10～20％の間で推移するかのようにも受け取られるが，全保持者を通じてその実相が［ŋ］で一貫する話者というのは実は一人も存在しない。現実には語ごと発音ごとに［g］と［ŋ］とを不定期に交錯させ，場合によっては回答に迷いながら，最終的に［ŋ］を選択するといった様相である。[注5]つまり図４からは，総体的な鼻音化率の面で衰退が確認されるばかりでなく，それの現れ方の面においてもきわめて不安定な状況が見てとれるのである。

なお，以下の図５によれば，そのような衰退の事態は東北方言の中でもひときわ目を引くものであることがわかる。

当図は「上げる」/ageru/ の鼻音化率をもとに，秋田県方言の若年層と宮城県３地点（大橋 2000a・2003b・2012）の少年層（高校生）とを対照させたものである。これに見てとれるように，大勢として［ŋ］の割合が高い気仙沼や石巻，ないしいは［g］化との葛藤の様相を

Akita University

図５　秋田県および宮城県３地点の鼻音化率比較



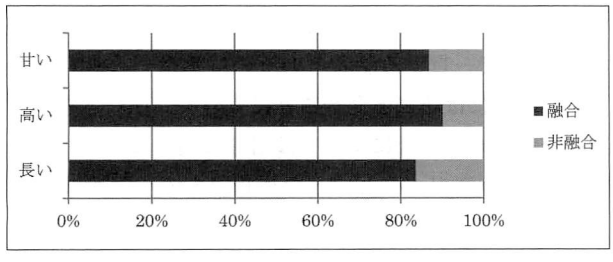

注）・気仙沼：2006 年調査
・石巻：2001 年調査
・仙台：1998・1999 年調査

示す仙台に対し，秋田では折れ線の落ち込みが急であり，いかにも心もとない状況にある。もちろん，以上はそれぞれに調査時期を違えており，単純な横並びでの比較はできないが，少なからず今後に向け，秋田が他地点を凌いで［ŋ］の保持へと舵切りしていくことは予測できず，むしろ尻すぼみの一途であることが推察されるばかりである。これ以降，当該方言においては，［g］と［ŋ］とを語や発音によって交錯させる上記のような状況を助長させつつ，あるいはそれさえも落としていきつつ，総体的な［ŋ］の割合をさらに狭めていくことが必至である。

### 2.3　/ai/ 連母音の融合化

これまでの事象がいずれも衰退の動きを鮮明にしていたのに引きかえ，当事象では一転，保持の動きが明確なものとなっている。具体的には以下の図６のようであり，各調査語において大差なく，およそ 90％弱の割合で融合音が確認される。

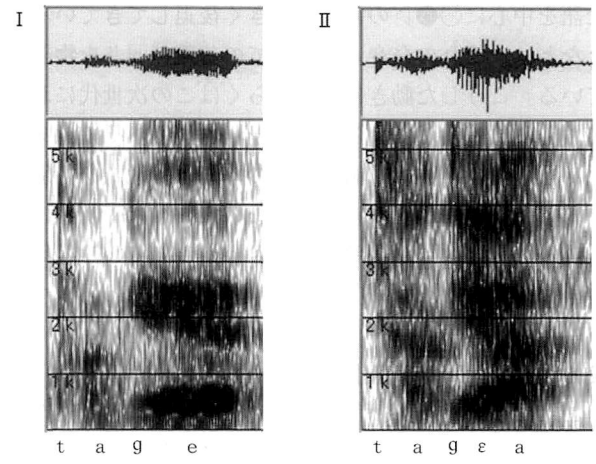
図６　/ai/ 連母音の実相




ただし，以上については既に東北の他方言においても同様の事態が確認されており（大橋 2002a・2003b・2012 など），それ自体は必ずしも秋田県方言を特徴づける独自の動きとはみとめられない。ここで特筆されることは，当該方言の若年層が単に融合音の割合の面で保持の色合いが強いばかりでなく，部分的にではあるが，さらにその実相面においても方言本来の特性が垣間見られるという点である。

大橋（2002a）などによれば，東北方言では各年層が等しく融合形を志向しながらも，その結果音に高・中年層と若・少年層とによる相容れない対立がある。つまり，高・中年層が元来の連母音［ai］に由来してその中間音である［ε］や［ε$^{a}$］を実現するのに対し，若・少年層では単に独立した別音の［e］が［ai］に代替して充てられているに過ぎないという対立である。このことをもって，大橋（2002a）などでは，若・少年層の融合音をまずは母音間干渉に依らない「一律［e］化」の原理に基づくものと位置づけた。またそれは，純粋な方言音本来の持続を表すというよりは，その発音をより機械的に単純化し，新たな融合段階へと展開しつつある姿（それによって上位年層以上に安定的な融合化が現れるに至っている姿）であろうと推察した。しかし当該方言の若年層には，まさに上記でいう高・中年層的な［ε］や［ε$^{a}$］が，個人により，あるいは調査語により，以下の図７のように散見されるのである。

図７　「高い」/takai/ のスペクトログラム




以上は，男性話者２名の「高い」/takai/ の実相を例に，各スペクトログラムを左右に対照させたものである。[注6] これによれば，まずＩが連母音内部において安定的なフォルマントを呈するのに対し，Ⅱではそれと同箇所においてフォルマント変動が著しい。Ｉは，その周波数から判断し，当該部が共通語音相当の［e］に現れていることが推定される。対するⅡは，当該部の後半に第一フォルマントと第二フォルマントとの接近があり，少なからずその発音が二重母音的な性質のものであること，また各周波数によれば，その具体音がおよそ［ε］～［a］への推移を辿るもの（つまりは［ε$^{a}$］）であることが推認できる。要するに当該方言においては，同じ若年層にあってもＩに限られず，高・中年層的なⅡの実相が不意に現れることがあるのであり，[注7] その聞き取りに予断がならないのである。

当該方言の話者たちは，先の鼻音化調査などとは対照

Akita University



的に，当事象の問いには躊躇なく融合音を回答し，それが当人たちの発音習慣としてかなり安定していることをうかがわせる。さらに強いて発音を求めずとも「この砂糖 アメァ」,「これ タゲァ」などのような作例を自らが持ち出し，それを自演し,「日常的によく使う言い方」のように内省しさえする。こうした事実と既見の図6や図7の事態を併せ考えるならば, /ai/ 連母音の融合化は，当該方言において今後もその方言色を色濃く示しながら，保持の様相を強めていくことが予測される。

## 3. 方言および方言使用をめぐる意識

以上，前項までにおいて，秋田県方言に特徴的な1）類別語彙二音節名詞第四・五類のアクセント，2）語中 /g/ の鼻音化，3）/ai/ 連母音の融合化をとりあげ，各々の若年層における動態を見てきた。その結果，1）2）がともに衰退の動きを鮮明にしている一方，3）がむしろ他方言にも増して保持の色合いを明確にしていることが把握された。当該方言において，こうした対照的ともいえる動きが事象を違えて生じていることの背景には，各話者の方言使用等に関するどういった姿勢ないしは考え方が影響しているのか。以下には，当年層話者の自県・自方言に対する意識を参照し，1）～3）に見られる動きとの関連を探ることにしたい。

### 3.1 秋田に対する意識

意識調査では，主として下注に記す選択式（ⅰ～ⅳ）のアンケートにより，秋田県および秋田県方言に対する好悪の意識，イメージ，また自分自身の訛りや使い分けの有無などについて尋ねている。

注）以下の図8～図11において，ⅰ～ⅳはそれぞれ次の選択肢のことを指していう。
ⅰ．思う，ⅱ．どちらかといえばそう思う，ⅲ．あまりそうは思わない，ⅳ．思わない
ただし，秋田・秋田県方言に対する好悪の意識を問うものについては次のことを指す。
ⅰ．好き，ⅱ．どちらかといえば好き，ⅲ．あまり好きではない，ⅳ．嫌い

**図8 秋田に対する意識**

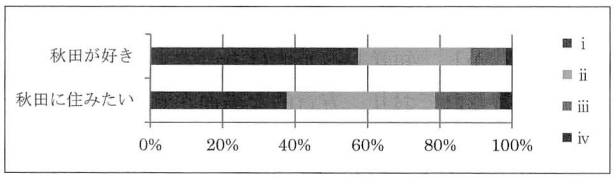
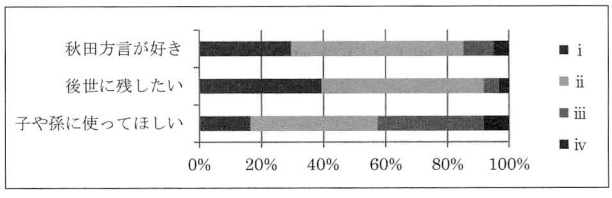



図8は，各話者の県人としての基本的な立場を明確にするために，地元秋田に対する好悪の意識をストレートに聞いたものである。これによれば，当年層では全体の半数以上に及んで秋田が「ⅰ．好き」であること，さらに「ⅱ．どちらかといえば好き」を加味した総計では約90%もの話者が秋田に好意的であることがわかる。また一方，今後も秋田に住みたいかを問うと「ⅰ．思う」が半数に至らず，秋田自体への愛着の意識とは相違する感もあるが,「ⅱ．どちらかといえばそう思う」との総計は80%に近く，やはりその受け止め方は好意的であるといえる。以上から，当該方言の若年層は，その大多数において「秋田が好き」であり,「今後もそこに住みたい」と思っている前提があることをまずは押さえておく必要がある。

### 3.2 秋田県方言に対する意識

次に図9では，さらに一歩踏み込み，秋田県方言に対する好悪の意識，およびそれを用いることについての価値判断を聞いている。

**図9 秋田県方言に対する意識**




これによれば，大勢として好意的な受け止め方が目立つ一方,「ⅰ．好き」や「ⅰ．思う」が先の図8よりも半減しているものがあり，必ずしもそれらが積極的な意味での好意とはいいがたい一面ものぞかせる。その点では，まさに選択肢でいう「ⅱ．どちらかといえば好き（そう思う）」といった心情であることがうかがえる。

他方，“後世に残したいか”と“子や孫に使ってほしいか”の問いに対し，ⅰ・ⅱの回答を多とする前者とⅲ・ⅳとの拮抗を見せる後者とに差がみとめられることは，当年層の心情心理を読み取る上で示唆的である。“後世に残したいか”は，どちらかといえば一般的な理念や価値観に照らし合わせてその可否を尋ねている。対して“子や孫に使ってほしいか”は，現実に想定される自分自身の将来の在りかたに即してその可否を尋ねている。つまり以上からは，方言の存在自体には肯定的に対することはできても，それの現実的な使用となると慎重にならざるをえない，当年層ならではの微妙な心理が垣間見られるのである。

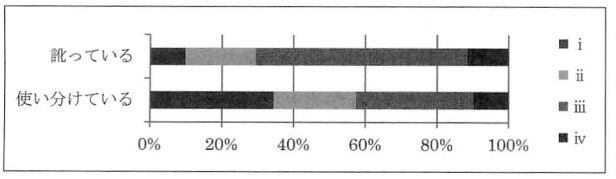
### 3.3 方言使用に関する意識

そうした心理との関わりにおいて次の図10を見ると，当年層話者の方言使用に関する意識も興味深いものとして受け取られる。

まず大局的に見て，当年層では大多数が自分自身の発音を訛っているとは思っていないこと，また一方，共通

Akita University

図 10　話者自身の方言使用に関する意識

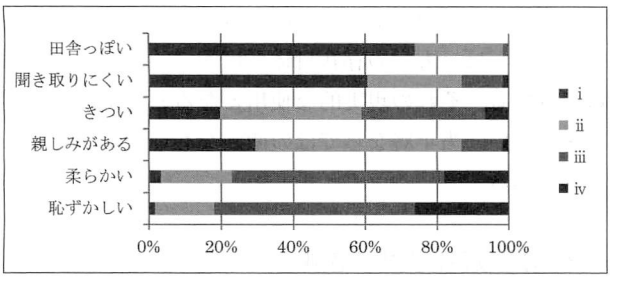



語との使い分けに関しては有（ｉ・ii）と無（iii・iv）とで大きくその意識が二分されることがわかる。このうちの前者，つまり“自分は訛っているとは思わない”の反応であるが，自由回答[注8]に「秋田の発音は濁音が強い」，「イとエの違いが聞き取れない」などの記述が見えることからも，各話者において，母体である“秋田県方言自体がよく訛る”ことについてはむしろ強い自覚のあることがうかがえる。その意味では“自分は訛っているとは思いたくない（思われたくない）”というのが本意であると考えられ，またそれは，上の図９に拮抗してみとめられた“子や孫に方言をあまり積極的に使ってほしいとは思わない”心情ともよく呼応するものと理解できる。他方，後者の使い分けの意識にｉ・iiとiii・ivとが二分して現れる事態であるが，これもまた，当年層の方言使用に対する立ち位置が，図９にみとめられるような微妙な心理とも相まって，個人ごとに定まらない状況にあることを端的に物語っている。つまり，“秋田県方言は好き”であるが“その使用となると躊躇する”といった心情のせめぎ合いを背景として，そのどちらにウエイトを置くかで，使い分けの意識が図 10 のように二分していることが推測できる。

### 3.4　秋田県方言の印象

さて調査では，以上のような好悪の意識および方言使用等に関する自己内省に加え，次の図 11 のように，話者自身が秋田県方言を具体的にどのようにイメージしているかについても尋ねている。

図 11　秋田県方言の印象




まず大局的に見て，ｉ・ii（思う・どちらかといえばそう思う）の割合が優勢であるのが「田舎っぽい」，「聞き取りにくい」，「きつい」，「親しみがある」の４項目，逆にiii・iv（あまりそうは思わない・思わない）の割合が優勢であるのが「柔らかい」，「恥ずかしい」の２項目である。つまり当年層話者は，その大多数が秋田県方言を「田舎っぽい」もの，「聞き取りにくい」ものと受け止めながら，一方で「恥ずかしい」ものとはあまり感じていないこと，また「柔らかい」よりは「きつい」印象が強いものの，総体としての秋田県方言にはそれなりの「親しみがある」ことがわかる。自方言に対し，ある部分ではシビアに捉えている反面，方言の存在自体やそれの総合評価の面では必ずしも否定的ではない（むしろ好意的でさえある）という，この錯綜する複雑なイメージの様相は，まさに既見の図９や図 10 にみとめられた当年層ならではの心理に通じるものがあると理解できる。

以上をまとめるならば，ごく大雑把ながら，当年層話者は地元の秋田も秋田県方言も基本的には好きであり，親しみを感じており，こと方言に関しては後世に残すべきものであるとも評価していることがわかる。しかし一方，自方言の具体的なイメージとしては田舎っぽく，きつく，聞き取りにくいものと感じており，それ故に自分自身はそうでありたくない，また自分の子や孫にもできればそうあってほしくないと意識していることがうかがえる。つまり，この良否が様々に入り組んだイメージなり意識なりが当年層の自方言に対する立ち位置を個人ごとに定まらないものとし，またそのことが既見の各種事象面における対照的ともいえる動きを結果させる一因にもなっていることが推察される。

### まとめ

以上，本報告では秋田県方言に特徴的なアクセントおよび音韻の各事象のうち，1）類別語彙二音節名詞第四・五類のアクセント，2）語中ガ行子音の鼻音化，3）/ai/連母音の融合化の３つに着目し，それぞれの若年層における動態を追究した。また，4）同年層の秋田県方言等に対する意識を参照し，その意識が１）～３）の各動態とどう関連するかについても検討を加えた。それらから明らかになった点を課題別に要約すれば，以下のとおりである。

1）規範としての東京式アクセントがほぼ確立している。しかし，知覚レベルでは方言本来のアクセントも保持されており，方言的な場面が意識された場合にはそれも併用されうる現状にある。ただし，非日常的な語を中心に知覚が薄れつつあるものもあり，上記のような使い分けの実態は必ずしも安定しているとはいえない。

2）特段に衰退が著しい。それは全体的な鼻音化率においてのみならず，各話者の本調査への応対ぶり（内省がはっきりせず，発音が一定しない）からもうか

Akita University



がえる。またこの衰退の度合いは，東北の他方言と比べてもひときわ目を引くものでもある。

3）保持の動きが明確である。各調査語において約90％の融合音が確認されるほか，部分的にではあるが，実相面においても上位年層的な中間音（元来の連母音［ai］に由来した［ε］や［ε$^{a}$］）がみとめられる。こうした事態は他方言の若年層にはみとめられず，その点においても保持の色合いが際立っているといえる。

4）自県・自方言に好意的な意識がある一方，方言自体にはきつく，聞き取りにくく，田舎っぽい印象を持っている。その結果，方言の価値はみとめながらも，それの現実的な使用となると躊躇するといった心情に帰着することになる。こうした良否が複雑に入り組んだ意識なりイメージなりが，事象面においても，1）～3）のような事態，つまりあるものはいち早く衰退し，あるものは逆に保持の色合いを濃くし，またあるものは使い分けの実態にあるという，それぞれに多様な動きを結果させる一因となっていることが考えられる。

**注**

1．話者の出身地の内訳は次のとおりである。

秋田市：34，横手市：5，潟上市：3，仙北市：3，能代市：2，大館市：2，鹿角市：2，大仙市：2，大曲市：2，湯沢市：2，由利本庄市：2，南秋田郡：2

つまりは秋田市が大半を占め，それ以外が四方にほぼ万遍なく分散するという内訳である。なお調査結果による限り，個別の地点的な特徴や，出身地による際立った傾向の差異は確認されなかった。

2．第二次調査は第一次調査の結果を踏まえ，同話者に，基本的には日を改めて行っている。ただし，調査の過程で追調査の必要性が確認できたことにより，調査順で39～61番目の話者については，第一次調査に次ぎ，条件を加味した第二次調査を継続して行っている。

3．調査は，具体的には「肩（カ$\overline{タ}$），肩が痛い（カ$\overline{タ}$ガイタイ）などとは言わないか」との問いに始まり，それが「方言的」であることを確認した上で，そのことを特段に意識した発話（読み上げ）を再度求めている。なお，第一の問いで「言わない」との回答が得られた場合にも，同様に「方言的」であることを意識した発話を求めることとした。

4．当事象に関しては，音環境や語構造などによる実相のバリエーションを想定し，実際には多角的に調査語を揃え，調査を実施している。しかし後述するように，当年層では鼻音化の存在自体が抽出しがたい現状にあることから，ここでは図3の10語に絞り，その実相を見ていくことにする。

5．調査では各調査語につき発音ごとに鼻音の有無を確認し，最終的に納得したものを当人の実相として捉えている。

6．分析は，「音声録聞見 for Windows」（DATEL）によった。

7．調査語の中では「高い」/takai/ の場合に最も［ε］～［ε$^{a}$］の実現の割合が高く，聴覚判断において，計12名の話者にそれが確認された。

8．調査では，「秋田の発音で訛りを感じるのはどんなところか」，「自分に訛りがあるとすればどんなところか」の自由記述を求めている。

**参考文献**


飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編（1982）『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会

井上史雄（1971）「ガ行子音の分布と歴史」『国語学』86

大橋勝男編（1993）「新潟市沼垂地区音声の研究―主要都市多人数調査」文部省重点領域研究『日本語音声』研究成果報告書

大橋純一（2000a）「ガ行鼻音」小林隆編『宮城県仙台市方言の研究』東北大学国語学研究室

大橋純一（2000b）「秋田方言の音韻・アクセント」秋田県教育委員会編『秋田のことば』無明舎出版

大橋純一（2001）「東北方言におけるガ行鼻音の動向」『文芸研究』第151集

大橋純一（2002a）『東北方言音声の研究』おうふう

大橋純一（2002b）「東北方言2モーラ名詞第四・五類アクセント―東西沿岸地域の比較を中心に―」『いわき明星大学人文学部研究紀要』第15号

大橋純一（2003a）「東北方言の二拍名詞・動詞アクセント―型区別の地理的・年代的状況に即して―」『いわき明星大学人文学部研究紀要』第16号

大橋純一（2003b）「音韻」小林隆編『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室

大橋純一（2004a）「総論」平山輝男・小林隆編『日本のことばシリーズ15　新潟県のことば』明治書院

大橋純一（2004b）「福島県相馬市方言における語中ガ行入り渡り鼻音」『国語学研究』第43集

大橋純一（2004c）「新潟県阿賀北地域における語中・尾ガ行音」『社会言語科学』第7巻第1号

大橋純一（2012）「音韻」小林隆編『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学国語学研究室

金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究　原理と方法』塙書房

齋藤孝滋（1992）「岩手方言における語中子音有声化・鼻音化現象―言語内的・外的要因の観点から―」『国語学』168

佐藤亮一（2005）「アクセント調査における「読ませる調査」と「言わせる調査」」佐藤喜代治博士追悼論集刊行会編『日本語学の蓄積と展望』明治書院

野口幸雄（1976）「新潟県下越地方におけるアクセント境界線―二拍名詞第四・五類による―」『ことばとくらし』第4号

平山輝男（1957）『日本語音調の研究』明治書院

森下喜一（1996）『東北方言アクセントの研究』おうふう